

1歳半の節と発達保障

特集

「1歳半の節」と発達保障

白石 恵理子

要旨

本稿では、発達保障の理念と実践が生成・発展してきた歴史において、発達の弁証法的合法則性の解明、とりわけ「1歳半の節」の認識が、どのような意味をもっていたのかについて明らかにしようとした。近江学園での「精神薄弱」児に対する教育実践や、天津市における乳幼児健診の実践等が、1歳半頃の質的転換期、1次元可逆操作といった心理学的認識をつくり出していったと同時に、それは新たな実践課題を提起し、また発達保障の理念と実践を進化させるという往還的発展の歴史でもあった。細分化された要素に還元していくような発達観、そこから導き出される教育観が今日も根強く存在するなかで、この歴史を振り返ることは、現在においても重要な意義をもつと考える。

キーワード 「1歳半の節」、1次元可逆操作、発達の弁証法、発達保障

1 「1歳半の節」がどのように認識されてきたか

「知能年齢1歳10ヶ月、重度の精薄児きよしくん。きよしくんは右のきき手にもった丸い板を、すぐ前の丸い穴にはめることはできる。穴の位置が反対になると、もうついていけない。きよしくんは、自分の体と心にぴったりとくっついていた行動をいろいろとくりかえすことはできるのだが、まだ外のように変ったとき、その意味がくみとれない。すべての正常な子どもも、1歳半までにこの段階を通る。そのことを明らかにしたのは、正常児ではなく、実はこのきよしくんたちである…」。

これは、近江学園の子どもたちの様子を映した『一次元の子どもたち』（東京12チャンネル制作、1965年4月放映）のナレーションの1節である。

しらいし えりこ
滋賀大学教育学部

1946年に戦災孤児と知的障害児の総合施設として創設された近江学園では、当初、軽度知的障害児が大半を占めていたが、その子どもたちが徐々に巣立っていき、1950年代後半からは県内の小・中学校に「特殊」学級が設置されていった結果、重度の子どもたちが増えていった。『一次元の子どもたち』では、発達年齢4歳頃までの「重度精神薄弱児」のグループが「新しく問題になってきた」というナレーションも入る。この子どもたちの教育方法をめぐっては職員間に意見の対立もあったが、真剣に議論し、実践で検証していくプロセスを重ねることで、「義務教育になったときの学校教育の中身はこうあってほしいということが提起できるように¹⁾」になっていく。「発達しないとみられている人たちの発達を研究し、発達の道を拓こう²⁾」という思いに裏打ちされた発達研究も熱心に続けられるなかで、障害の重い子どもたちを学校教育から排除するのではなく、障害の重い子どもたちこそが、「教育の成り立つ基盤に何が必要なのか」を知らしめる存在でもあるという実践的認識を生み出していった。

はじめて「発達保障」という表現が使われたのは1961年とされるが³⁾、同じ年から、「発達上の質的転換期というものがあるということ」が想定されるようになる。1962年になると、質的転換期として新たに「1歳半から2歳」が加えられ、1963年からは、「(質的転換期の)前から次の指導課題に取り組める教育体制とする」、「発達の同質な学習教育活動の集団、等質な生活教育活動の集団、異質な生産教育活動の集団と、自由あそびの場を保障し、指導者には1専門2領域を保障する」など、質的転換期を意識した集団編成や指導課題が追求されはじめる。そして1965年になると、「可逆操作の導入に成功」し、「精神年齢で二歳以下の人たちのばあいには、心理的な1次元での世界の操作がもつれているが、そのもつれが克服できるように、2次元のひろがりを中心につくるような共感の機会がつけられているか」と問題提起がなされていく⁴⁾。

近江学園において、子どもを生活や学習に適応させるだけであってはならないという理念は50年代からあったが、さらに生活を変革する主体に育てていくという教育実践となっていくためには、発達の解明が不可欠であった。その解明が進むなかで、教育指導のあり方も提起されていったのである。

2 はめ板課題と1次元可逆操作

さて、上述の『一次元の子どもたち』に戻ろう。田中昌人は、「1次元可逆操作の獲得に障害がある子どもたち」とか、「1次元可逆操作の壁」と表現するようになったのは、この頃だと言う⁵⁾。映像では、子どもたちの食事や洗面といった日常生活の場面とあわせて、彼らがはめ板などの検査課題に取り組む様子が映されている。

先のナレーションにあるように、はめ板課題に取り組むきよしくんは、目の前の円孔に円板をはめ込むことはできるが、基板が180度回転したとき、その変化についていけず、目の前の四角孔に円板をはめようとしてしまう。田中は、「可逆操

作の高次化における階層-段階理をつくっていく過程で、最初に命名した」のが1次元可逆操作であり、「精神薄弱」児の場合、獲得までに長時間かかることが、「長いことになっていた事実だった」と述懐している。はめ板課題について、京都児童院式のテストでは「できる」か、「できない」かで評価されることがほとんどであったが、「できない中にも位置反応があるし、お手つき反応がある。発達に障害があるばあいにはこの位置反応やお手つき反応が長く続き、神経症症状などもそなわっている。これができるということはそれら諸問題が大きく解決することになる」という事実気づき、「そういう質的転換期だということ」で、180度入れ代わったことに対する可逆操作ができるというわけで、これを一次元可逆操作とした⁶⁾と述べる。「『入れてね』で入れられるのは、相手と自分との間に定位的共有をしたことを示して」いるが、180度位置が変わっても入れられるようになると、「『入れる』ことが普遍性をもち、1次元の可逆的の成立にいたる」と考えた。だからこそ、「入れた」「入れられなかった」と結果だけを評価せずに、「どのようにして逆を発見するかをみるのが重要⁷⁾」と述べる。

このきよしくんは、朝、洗面所に向かうシーンでは、指導者から手渡された洗面器をもって洗面所に向かうものの、そこで顔を洗うという行動には結びつかず、手をヒラヒラさせながら窓からの木漏れ日に心を奪われていく。洗面器は廊下に置き去られている。まさに「自分の体と心にぴったりとくっついた」外の世界を受け止めることはできるが、変化を受け止めて自分を調整することは難しいのである。ときには外の世界に「自分の体と心をぴったりとくっつ」けてしまうため、自分が本当は何をしたかったのか見失ってしまうこともあるのだろう。一つひとつの行動が途切れてしまうきよしくんに対し、指導者は、少しでも行動が繋がっていくようにと声をかけたり手を添えたりする。

そんなきよしくんが、食事前に厨房までお茶を取りに行くシーンがある。自分たちの居室から厨